

「Green Piece」

— 園田昂史個展 —

風景の向こう側 紡ぎだすもう一つの風景

彼の作品には、緑に彩られた広陵とした敷地に存在するグリーンランドとその一角には、遊園地を象徴するかのようによびえ立つ巨大な観覧車が描かれている。そんな何気ない風景の中に園田は、もう一つの景色を見つめている。それは、彼が紡ぎだしたナラティブの世界。彼は制作にあたって、何故この地にこの風景が存在するのかという素朴な問いかけから始めた。広範囲なリサーチ活動を通し自身の体験から導かれたパーソナルな事象を取捨選択し情報を精選した。それらを一つひとつ丁寧に結びつけながら、通常では予想だにしないような物語として作り上げた。それが作品においては、心象風景の絵画と映像作品として変換されている。正直なところ、この意外性のある着想に驚きを覚えた。しかもこのテーマが、作家の個人的な体験に端を発しているにも関わらず、過去と現代、そして他者と自分を繋げる複層的な要素を普遍的な視点として表現の幅を広げ、絵画・立体・映像として介し、新しい空間表現の装置として昇華させている。このことは、今後、彼の表現の展開が、次なる社会や政治的なテーマへと洗練されていく方向性として感じられ、非常に興味深い。ともあれ園田の表現に対する外連味のない一途な情熱は、いったい何処からくるのだろうか。そう思わずにはいられないほど不思議な魅力もった作家である。

大川市立清力美術館 館長 弥永 隆広

展覧会イベント

園田昂史

 アーティストパフォーマンス
ギャラリートゥアー

 2024.2.17 (土)
14:00-15:30

定員20名 要予約 参加費 300円

会場：AIR motomoto ギャラリー

内容：

14:00 (30分程度)

園田昂史による会期中1度きりのパフォーマンス

14:30 (1時間程度)

作家・園田昂史自身による展覧会ツアー

滞在期間や制作に至るまでのお話をガイド形式で

<申し込み方法>

 メール件名を「園田昂史イベント参加希望」とし
本文に以下を明記の上

kumamotomomoto@gmail.com

までお送りください。

①参加者氏名 ②参加人数 ③代表申込者電話番号

※当日予約無しでも受入可能な席があれば参加可能



園田 昂史

SONODA Takashi

1989年、熊本県生まれ。ドイツ在住。

2014 広島市立大学大学院彫刻専攻 修了

2023 アラヌス大学 ヨハンブレメクラスマイスターシューラー課程 修了

主な展示

個展

2023 Wie ist dein Name Jetzt? (BauSchau デュッセルドルフ、ドイツ)

2023 遠くの花 (アラヌス大学、アルプター、ドイツ)

2022 スコットランドの花 (Freiheitsaushalten、ケルン、ドイツ)

グループ展

 2022 一席之地 Verortung (Externe Ausstellung 2022 Gallery Cubepuls im Topfhaus
Alter Botanischer Garten Kiel) キール、ドイツ

2022 二人展 園田昂史、武田竜真 (清力美術館、福岡)

2022 Our Attitudes (熊本市現代美術館、熊本)

2022 どこかで? ゲンビ (広島駅南口地下広場ショーウィンドウ (広島市南区松原町 9-1)

(主催、広島市現代美術館、広島)

ドイツと日本を拠点にして、彫刻、ビデオパフォーマンス、インスタレーション等を制作。

自己変容という手法を用い自然現象の裏側に潜む形態とその変容性について問いかけることを試みている。

2023年度 AIR motomoto 招聘作家・園田昂史は、昨年11月から本格的に本施設にて滞在、リサーチを開始しました。

当初から、グリーンランドと観覧車に強い関心を抱き、北海道にあるもう一つのグリーンランドへも足を運び、調査と考察を重ね、今回の展覧会へと臨んでいます。AIR motomoto 滞在アーティストの中で、園田は最も荒尾を自身の足で歩いた作家であり、散策の中で出会う新たな気づきを、我々レジデンススタッフと最も共有してくれた作家でもあります。

「グリーンランドの観覧車は、荒尾の何処から見えるのか」を11月初旬から探し、毎日約2〜3時間荒尾を歩き回り、ポイントを地道に見つけていきました。大牟田にも観覧車があること、2つの観覧車が同時に見れる場所を見つけたことを喜ぶ姿は、正に少年としか表現出来ないものでした。園田の興味、感心は多岐に渡り、「観覧車はなぜ赤が多いのか。」「グリーンランドはなぜ「グリーン」なのか」「緑とは一体なんなのか」「北海道にあるグリーンランドは、ホワイトランドではないのか」滞在期間の3カ月強でいくつもの疑問を抱き、答えを探して、純朴に歩き回る姿勢は、効率ではなく、無駄を厭わない愚直なものでした。自分自身で歩き、見て、感じ、考え続けて、作家が見つけた発見は、どれも歓びと美しさに満ちています。大きな問いと真っ直ぐに向き合った作家の生み出した現時点での作品をぜひ、足を運んで見て頂けたら幸いです。